本学における CLIL 教育の促進に向けて

CEGLOCセンター長　磐　崎　弘　貞

大学入試改革の目玉の１つとして、大学入試センター試験に代わって、2021 年度入試からは 4 技能を測る英語民間試験の利用が予定されていた。しかし､2019 年、文部科学省はこの導入を見送ることを決定したと発表した。この決定についての正と負の波及効果については様々な議論がなされているが、その陰に隠れているのは、依然として、英語の技能、特に発信技能（スピーキングおよびライティング）の向上は、日本人学習者が今後確実に向上させていく必要があるという点である。

既に、2018 年の高大連携に関するシンポジウム（進学基準研究機構 [CEES]）において、高校教員・布村奈緒子氏から、高校側では新学習指導要領で謳われている英語 4 技能 5 領域（読む･聞く･書く･話す［発表］、話す［やり取り］）でのコミュニケーション能力育成をしっかり実践するので、大学語学教育においてもその力を落とすことなく継続して育成してほしいという主旨の発言がなされている。そのメッセージは、上記の外部試験導入中止とは全く独立して、2020 年においても我々大学人が真摯に受けとめる必要がある。

そうした方策を実行するため、CEGLOC では、以下のような筑波大学統合言語学習（Tsukuba Integrated Language Learning, TILL）環境を整備しつつある。

(1) CLIL の実践	一般共通科目としての英語では、徹底的な内容言語統合学習（Content and Language Integrated Learning, CLIL）による一般学術目的の英語（English for General Academic Purposes, EGAP）教育の推進
(2) 各言語の連携	CEGLOC における外国語教育部門（英語および初修外国語）、日本語教育部門（留学生向け）、国語部門が連携して行う言語教授法の開発や情報共有
(3) 全学への CLIL サポート	専門課程教育における CLIL による特定学術目的のための英語（English for Special Academic Purposes, ESAP）教育のサポート（例：CLIL クラス教員育成のための FD セミナーの実施、e-learning 教材の提供など）

こうした点を、発信能力の育成という観点から見ると、以下のような 3 つの重点項目がどの言語においても当てはまる。

まず、コロケーションの重視である。たとえば、「相関関係」が correlation、

correlation が「相関関係」という対応になっているということを知っても、実は、発信能力には結びついていない。なぜならば、そこには、語と語の慣用的・意味的結びつきの視点が抜けているからである。つまり、これを使いこなすには、日本語ならば「高い／中程度の／低い相関関係がある」というコロケーションを知っておく必要がある。英語ならば have [show] a high [moderate, low] correlation のようなコロケーションが重要となる。これを熟知していないと、たとえば当該言語のプレゼンテーションで相関関係の説明はできない。こうした語彙の観点は、語彙の広さ（breadth）に対して、語彙の深さ（depth）のポイントの 1 つと言える。

2 点目は、確かに語彙を増やすことはどの言語においても重要であるが、同時に、それをわかりやすく、やさしく説明する能力が求められている。これはパラフレーズ(paraphrase)能力と言われるものである。たとえば、日本人が英語を使う場面は、実は英語圏の人達よりも、英語を外国語とするアジアの人達に対しての場合が多い。そのために、難解な低頻度語を避けるだけではなく、1 つ 1 つの語が全体の意味の総和と等しくない、いわゆる「不透明な表現」（狭義の「イディオム」とも呼ばれる）も避ける必要がある。こうした外国語表現は、理解できなかったり誤解を生じやすいからである。そこで、たとえば、以下の下線のような表現を言い換えることができるスキルが求められる。

(1) This policy is <u>tantamount</u> to political suicide.（未知語となり得る低頻度語）

(2) It is possible to <u>flip the script</u> and create a positive cycle of learning.（「台本をめくる」と解釈すると意味を成さない不透明な表現）

こうした表現とその意味を知ることは、それ自体は有意義なことであるが、それがノンネイティブスピーカーに対しては、メッセージ伝達の障害になり得ることも知っておく必要がある。そこで、こうした語句を高頻度語や透明な表現で記すと以下となる。

(3) This policy is <u>the same as</u> political suicide.

(4) It is possible to <u>reverse the situation</u> and create a positive cycle of learning.（flip the script とは「状況を逆転させる」の意）

こうした言い換えは、発話者自身が思いつかなければ、たとえば英英辞典を引くことで、その定義をパラフレーズ表現のサンプルとして利用することができる。これは日本語の低頻度語や不透明な表現に対しても同様のことが言え、適切な辞書を使うことで、練習による修得が可能なスキルである。

3 点目として、こうした運用能力の育成には、その実践環境が必要である。すなわわち、CLIL 環境においては、たとえば講義を英語で行う環境でも、学習者自身が発信を行う場面（たとえばプレゼンテーションをする、グループディスカッションをするなど）を設ける必要がある。これによって、上述のコロケーションやパラフレーズを意識し、インプットとアウトプットを統合した学習が可能となる。ただし、そうすると、講義で内容を伝えるだけの場合よりも教える内容量が減ってしま

うという懸念は常に指摘される点である。この点は、言語運用能力向上とのトレードオフとして考えていただく必要があるだろう。

おりしも、日本の子供達は言語解釈能力においてAIに劣っているという衝撃的な指摘がなされたのも比較的最近のことである（新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社）。外国語能力の育成には、こうした母語における読解能力の育成とも密接に関係しており、大学における国語の重要性も決して減じられているわけではない。そうした教育と共に、言語の発信能力の育成についても、CEGLOCは本学の屋台骨となって各種施策を実行していきたいと考えている。